

その他

図書館員による大学教育、FD、大学運営貢献

—教職員の連携を目指して—

上 野 恵*

1. はじめに

2004年4月国立大学の法人化を受けて、全国の(旧)国立大学は大学の活性化、さらには、世界的にも高い評価を受け得るような大学を再構築していくことを国からも国民からも期待されている。それを受けて本学では図書館員を含め大学教職員も大学運営に積極的に関わっていく必要性を提言している。大学図書館で働く者として、今後、情報社会・国際社会に適応でき、現代社会に必要とされる社会人を育成するため、図書館としてどのように大学教育に関わっていけば良いか、また教職員共同の意義を提言するため、本学の取組の事例を紹介したい。

2. 1. 図書館員による授業

本学は、2004年から資格習得科目・系列専門科目として、「情報メディアの活用」の授業を図書館員が担当している。特筆すべきは、法人化後の学長裁量により、現職のままで学内非常勤講師の発令を受けたことである。資格習得科目は夏季の集中科目、系列専門科目は半期2単位、火曜日2限の科目である。これは学校図書館の運営に携わる司書教諭に必要なメディアの活用に関する全般的知識を身に付けることを目的とする。特に、情報メディアを活用する上で必須になる著作権の理解をすすめること、各種コンテンツやインターネットの活用に関する基礎知識を身に付けることなど、実践的な内容を盛り込んでいる。

[参照2005.11.30] (URL: <http://goose.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/syllabus/ResultIndex.asp?page=0>)

これ以外にも、教員の正規授業の中で、「情報リテラシー教育のための各種研修会」として、データベース検索をはじめとする情報検索、また、情報整理・発信を目的として、Microsoft社のPowerPointをはじめとする各種ソフトの操作法、さらにHTML言語によるHP作成法また情報モラルの指導を図書館員が担当している。その中で、教員からは、将来的に学校教師になる学生は元より、そうではない学生にも「社会人基礎力」として必要な授業と評価され、学生のアンケートからも「実践的な授業内容だった」との声がある。ただ、回数の増加に伴い、図書館員のみで対応することへの限界があり、授業の質低下につながる危惧もある。どこまで図書館員が实际的に、教員の授業サポートとして一定の質を保持したものを提供できるかを判断することが課題と推察される。そのために教員や、外部講習機関等との連携・棲み分けの必要性が挙げられる。

[参照2005.11.30] (URL: <http://www.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/kanpo/>)

2. 2. 図書館員によるFD事業

本学は、図書館学の塩見昇先生の提言により、1998年より図書館員によるFD事業をはじめており、教員と学生もとり込み、図書館からの大学教育への貢献を目指している。

* 大阪教育大学附属図書館
Librarian, Osaka Kyoiku University Library

例としてそのうち2回分を紹介する。2002年11月開催、第5回FD事業は「大学教育研究と著作権、大学図書館」と題して、大阪市立大学学術情報総合センター教授北克一先生を講師に迎えてのフォーラムだった。参加者は大学内教職員・学生等で40名ほどで、大学教育研究や著作権に関して、教職員・学生を交えた討論の場となった。

また、2004年6月には、2003年11月3日から29日まで文部科学省主催の海外研修でスウェーデンの大学図書館で実務研修を受けた図書館員による第6回FDが開催された。

[参照2005.11.30] (<http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/gakuho/gakuho/04-natu/gakuhou04-natu08.html>)

そこでは、IT化の進んだ図書館、コミュニケーション重視の図書館、相互協力の進んだ図書館、美術館に準ずる役割の図書館、利用者の幅を広げた図書館(成人、子ども、外国人利用者、高齢者、障害者含む)の例が示された。詳細は、スウェーデン ヴェクショー大学図書館からのメッセージ”、「大学図書館研究」、国立大学図書館協議会 学術文献普及会、71、2004.8、p33-40をご参照ください。

特に、教員の情報収集の担い手となっているコンタクトライブラリアンの重要性が訴えられた。これは日本では一般的に「サブジェクトライブラリアン」と言われ、「図書館主題専門官」と訳されることもある。ある主題についてまた、その情報源について網羅的に研究している図書館員を指す。教員の情報収集の手助けのみではなく、教員の授業の一部を情報の分野からサポートしたり、学生の情報相談に応じたりしている実情が紹介された。

このFD事業を定期的に行うことにより、大学や社会全体の流れ、教職員・学生を含め、現在の利用者ニーズを把握し、大学組織の一部として、図書館がまた図書館員が貢献できる方法を模索する機会となる。

図書館員によるFD事業の課題として、どのような方法をとれば、大学事務局や利用者に、図書館・図書館員への理解が得られるかという開催方法、またフォーラムの形を為すことで、図書館からの一方的なPRと解釈され兼ねないので、フロア参加型をとり、現場にフィードバックできる土壌作りの必要性が挙げられる。そのために、大学事務局・利用者との連携が重要だと思われる。

2. 3. 図書館員による大学プロジェクトへの参加

本学は、2005年4月に大学教職員の協力による大学活性化を目的とした「夢プロジェクト」を発足させた。既存の組織・形にとらわれない自由な発想で、大学構成員の夢を形にしていこうことを趣旨とする。メンバーは、大学の事務職員、大学教員、附属学校教員など20名で構成されており、2005年10月に当プロジェクトがまとめた「夢」提案を学長に提出し、学内外へ公表し、現在着手の段階にある。

[参照2005.11.30] (URL: <http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/news/0505/dream.html>)

これら一連の活動は、大学HPにリンクされている夢プロジェクトブログにRSS(時系列)にて紹介されており、コメント機能を利用して、ブログ閲覧者とのコミュニケーションを図ることも可能としている。

これにも図書館員が2名参加し、学内構成員の夢のとりまとめ、他大学視察出張、報告書作成を行った。その際、大学全体と図書館との連携の上に立った、「教育系電子情報展開」や、「情報リテラシー教育充実」を提案した。教育系電子情報は、現在その必要性が認識されつつある「学術機関レポジトリ」(学内成果物を電子化し、学内外に発信し、研究成果を報告するもの)とも関連がある。学術機関レポジトリは、学内成果物の長期的保存と、学内の研究活動を社会に公表するアカウントビリティの意義をもつ。それらの情報収集・整理・発信には図書館を主体として、大学全体の協力が求められる。また、情報リテラシー教育に関して、2. 2. でも紹介したが、教員の授業とタイアップし、これから社会に巣立つ学生の「社会人基礎力」として、その教育の役割を図書館が担うことへの理解を促進した。

しかし、図書館員の大学運営貢献の課題として、図書館は大学の附属機関であって中枢機関ではないので、大学全体の情報や動きが掴みにくい。そのため、大学内での横の連携さらに大学機関の一部として機能できるよう働きかける必要がある。また、実際教員と共同して、大学教育・大学運営に携わって

いくならば、相応の知識・経験が必要だと思われるが、現実には図書館員は日常業務に忙殺され、研修参加もままならない。そのため、いかに勤務時間外に自助努力により研鑽していくか、その地道な継続的努力による部分が大きい。つまり、図書館員個人への負担にかかるということになり、そこに問題点が見られる。図書館員の研修・研鑽とそれに当てる時間・予算に職場の理解、また大学全体の理解を求めることを希望する。そのためには、図書館員自身も図書館員の仕事や大学運営貢献度を機会あるごとに説明していくことも求められる。

3. まとめ

2004年4月国立大学の法人化を受けて、教職員の意識改革が叫ばれている中、情報収集・整理・提供・教育部門で、図書館員がどのように大学教育また運営に貢献できるかの本学における事例を紹介した。

大学活性化のためには、教職員の協力体制強化が必要だと思われる。そこで、大学教員の授業に図書館員がサポートする方法、また、大学運営面で、図書館と図書館員を有効活用する方法の実例と課題は紹介したものがあがるが、それ以外の可能性もあると予測される。本報告において、大学は今後さらに、社会の流れや学生を始めとする大学構成員のニーズを掴み、教職員共同で形にしていく努力の必要性を提言する。

(備考：本稿は、京都大学での『第12回大学教育研究フォーラム』成果報告に掲載されたものです。)